

# 梵文根本有部律破僧事「給孤独長者入信説話」和訳

平 岡 聡

## はじめに

仏教教団は、世俗の生活を離れ、修行に専念するため、生産活動には携わらなかった。したがって、生活の基本となる衣食住については、在家信者からの布施に頼らざるをえなかったのである。さいわい、最初期の仏教教団は、ブツダや仏弟子達の熱心な布施活動が奏功し、有力な在家信者を獲得したようだが、その中でもとりわけ重要なのがビンピサーラ王とスグッタ長者（＝給孤独長者）であることに異論はなかり。この二人の帰依がなかったら、仏教教団はそのスタート時点でいきなり躓いていたかもしれない。

二人の帰依者のうち、スグッタ長者（給孤独長者）がいかに仏教と出会い、仏教に入信したかを語る文献は、以下に示すように数多く存在する。

Pāli: Vinayaṭṭakā ed. H. Oldenberg, London, 1880 (ii 154.26-159.21).

Skt.: The Gilgit Manuscript of the Saṅghabhedavastu (Part 1), ed. R.

Gnoli, Roma, 1977 (166.16-181.16); The Gilgit Manuscript of the

Śayanāsanavastu and the Adhikaraṇavastu, ed. Gnoli, Roma, 1978

(14.13-27.17).

Tib.: Derge 1 Nga (79a4-89b5).

漢訳：『根本説一切有毘奈耶部破僧事』(T. 1450, xxiv 138b18-142b12).

『衆許摩訶帝経』(T. 191, iii 966a8-969b22).

『中阿含経』(T. 26, i 459c9-461b14).

『摩訶僧祇律』(大正 1425, xxii 415b3-c9).

『四分律』(大正 1428, xxii 938b20-939c15).

『五分律』(大正 1421, xxii 166c10-167b19).

『十誦律』(大正 1435, xxiii 243c20-244c27).

このうち、以下に和訳を掲げるのは、質量ともにその白眉とも考えられる梵文の根本有部律破僧事 (Saṅghabhedavastu) 所収の「給孤独長者入信説話」部分である。和訳に当たっては Gnoli の校訂本を底本とし<sup>1)</sup>、これに対応している Tib. と、漢訳では『根本説一切有部破僧事<sup>2)</sup>』を参照し、必要に応じてその内容を注記する。

## 和 訳

[166] さてその時、世尊はヴェーヌヴァナ・カラダカニヴァーパで時を過ごしておられた。ある長者がラージャグリハにあり、彼は比丘の僧伽と共に世尊を〔自分の〕家に<sup>3)</sup>呼んで食事に招待した。その時、アナータピンダダ長者は所用でラージャグリハに到着した。彼はその長者の家で一夜を過ごした。その時、その長者は夜中に起き、家人達に言った。「お前達<sup>4)</sup>、起きろ。みんな、起きるのだ。薪を割れ。燃料に点火せよ。食事を用意せよ<sup>5)</sup>。スープを調理せよ。お菓子〔の生地〕をかき混ぜよ<sup>6)</sup>。食堂を飾り付けよ<sup>7)</sup>」と。

その時、アナータピンダダ長者はくこの長者の結婚式や婚礼でもやるのだろうか<sup>8)</sup>、あるいは彼が明日、国民・群衆・団体・衆会、あるいはマガダの王シュレーニヤ・ビンビサーラを屋内で食事に招待でもするのであろうかと考えた。こう考えると、その長者にこう言った。「長者よ、あなたは結婚式や婚礼でもやるのか、あるいはあなたは明日、国民・群衆・団体・衆会、あるいはマガダの王シュレーニヤ・ビンビサーラを屋内で食事に招待でもするおつもりか」と。

「長者よ、私は結婚式や婚礼をするのでないし、私が明日、国民、群衆、団体、衆会、あるいはマガダの王シュレーニヤ・ビンビサーラを屋内で食事に招

待するのでもない。そうではなく、ブツダを上首とする比丘の僧伽を屋内で食事に招待したのだよ」

[167] その時、アナータピンダダ長者は「ブツダ」という、今まで聞いたことのない言葉を聞いて全身の毛穴が粟立った<sup>9)</sup>。彼は毛穴を粟立てると、長者に言った。

「長者よ、そのブツダとはどのようなお方だ」

「長者よ、それは沙門ガウタマのことだ。彼はシャーキャ族の子で、シャーキャ族の家系の出身で、髪と髭とを剃り落とし、袈裟衣に身を包んで、正しい信念を以て家持ちの状態から家なき状態へと出家されたのだ。彼は無上正等菩提を正等覚されたが、長者よ、彼をブツダというのだ」

「では長者よ、僧伽とは何だ」

「長者よ、クシャトリヤの家系出身の善男子達も髪と髭とを剃り落とし、袈裟衣に身を包んで、正しい信念を以て家持ちの状態から家なき状態へと、出家された世尊に従って出家されたのだ。またバラモンの家系、ヴァイシャの家系、シュードラの家系出身の善男子達も髪と髭とを剃り落とし、袈裟衣に身を包んで、正しい信念を以て家持ちの状態から家なき状態へと、出家された世尊に従って出家されが、長者よ、それを僧伽というのだ。明日、私はブツダを上首とする比丘の僧伽を屋内で食事に招待するのだよ」

「長者よ、その世尊は今どこで時を過ごしておられるのだ」

「この同じラージャグリハにある死体遺棄場シータヴァナでだ」

「長者よ、我々は世尊にお出会うことができるのか」

「それなら、長者よ、もう少しの辛抱だ。明日ここに来られたら、会えるではないか」

その夜、アナータピンダダ長者はブツダを所縁とする念を持して眠った。まだ夜が明けていないのに夜が明けたと思い、彼は南門に近づいた。ちょうどその時、南門は夜の初更と後更の二更には開いたままになっていた。〔初更は都城に〕やってくる使者達の、〔また後更は都城から〕出ていく〔使者〕達の便宜を計ってのことであった<sup>10)</sup>。〔さて〕彼が見てみると、南門は開いたままになっており、光に満ちていた<sup>11)</sup>。彼は<sup>12)</sup>くきっと夜が明けたのだ。だから南門

が開いたままになっているのだ」と考えた。こう考えると、その同じ光に導かれて都城から外に出た。外に出るや否や、その光は消失し、闇が出現した。彼は恐れ、戦き、鳥肌が立った。「人か非人か悪漢か誰かに害されてはたまったものではない！」<sup>13)</sup>と。

[168] こう考えると、引き返そうとした彼は、マドゥスカング天子の祠を右遷し、敬礼した<sup>14)</sup>。その時、マドゥスカング天子は<sup>15)</sup>「今日こそ、アナータピンダダ長者は真理を知見すべきだ。仏・世尊と会う機会を逃したら、この同じ今日、彼は他の神を敬礼してしまうに違いない<sup>16)</sup>」と考えた。こう考えると、彼は<sup>17)</sup>南門から死体遺棄場シータヴァナまでの間を<sup>18)</sup>広大な光明で照らし出し、アナータピンダダ長者にこう言った。「長者よ、前進せよ。後退してはならない。前進すれば汝に幸福があるが、後退したらそれはない。何故か」と、

百頭の馬、百の金貨、牝騾馬を繋いだ百の車、様々な財で一杯になった、牝馬を繋いだ百の車も、〔今〕一步前進することの十六分の一に如かず。

長者よ、前進せよ。後退してはならない。前進すれば汝に幸福があるが、後退したらそれはない。何故か」と、

雪山の如くで、黄金や珠宝で飾られ、轅の如き牙を持ち、立派な体格で、荘厳された<sup>19)</sup>百頭の象も、〔今〕一步前進することの十六分の一に如かず。

長者よ、前進せよ。後退してはならない。前進すれば汝に幸福があるが、後退したらそれはない。何故か」と、

珠宝の耳飾りを懸け<sup>20)</sup>、黄金の腕環を付け、首に首飾りをして見事に荘厳されたカンボジアの<sup>21)</sup>少女等も、〔今〕一步前進することの十六分の一に如かず。

長者よ、前進せよ。後退してはならない。前進すれば汝に幸福があるが、後

退したらそれはないのだ」と。

その時、アナータピンダダ長者はその天子にこう言った。[169]「そなたよ、あなたは誰なのだ」と。

「長者よ、私はマドゥスカンダと呼ばれる青年僧であり、昔あなたの家の友人であった。この私は比丘シャーリプトラとマウドガリヤーヤナとに対して信仰心を抱き、死没すると、四大王天に生まれ変わり、ちょうどこの南門に住み着いたのだ。だから私はこう言うのだ。『長者よ、前進せよ。後退してはならない。前進すれば汝に幸福があるが、後退したらそれはないのだ』と」

その時、アナータピンダダ長者はくブッダが<sup>22)</sup>賤しき方であるはずがないし、説法が劣っているはずがない。だって今、神はこんなにも熱心にその世尊に会うことを勧めてくれるのだからな>と考えた。こう考えると、彼はシータヴァナに近づいた。ちょうどその時、世尊は精舎の外にある露地で普段より長めに経行し、アナータピンダダ長者を待った<sup>23)</sup>。アナータピンダダ長者は遠くから世尊を見た。そして見ると、再び<sup>24)</sup>世尊のもとに近づいた。近づくと、長者は世尊に「世尊はぐっすりとお休みになられましたか」と丁寧な挨拶をした。すると、その時、世尊は詩頌を唱えられた。

「解脱し、執着なく、諸欲に染まることのない婆羅門は、〔煩惱の火を〕消し、あらゆる仕方で快適に床に臥す。この世で一切の執着を<sup>25)</sup>断ち、心の熱を取り除き、寂静となりし者は、寂静を得たる心と共に快適に床に臥す」

その時、世尊はアナータピンダダ長者を連れて精舎に入り、設えられた座に坐った。その時、アナータピンダダ長者は世尊の両足を頭に頂いて礼拝し、一隅に坐った。世尊は一隅に坐ったアナータピンダダ長者を法話によって教示し、励まし、元気づけ、鼓舞した<sup>26)</sup>。

— 諸仏・諸世尊には、前もってしておかねばならない法話がある。すなわち、施論・戒論・天界論<sup>27)</sup>である。 —

〔世尊〕は諸欲の享受<sup>28)</sup>と過失・〔諸欲の〕穢汚と浄化・〔諸欲からの〕出離

と遠離に関する利点と〔煩惱の〕浄化に資する法を<sup>29)</sup>詳細に明らかにされた。また〔彼の〕心が歓喜し、善良で、喜びに満ち、障害を離れ、優れており、勝妙なる説法を了解する能力があると世尊が見た場合には、諸仏・諸世尊の勝妙なる説法、〔170〕すなわち苦・集・滅・道という四聖諦を詳細に明らかにされるが、アナータピンダダ長者はその座に坐ったままで苦・集・滅・道という四聖諦を洞察した<sup>30)</sup>。ちょうど染みがなくて染色に適した<sup>31)</sup>純白の布が染料の中に入れられると見事に染まる如く、アナータピンダダ長者はその座に坐ったままで苦・集・滅・道という四聖諦を洞察したのである。

その時、アナータピンダダ長者は法を見、法を獲得し、法を知り、法を了解し、疑いを超え、疑念を超越し、自立し、誰からの指図も受けず、師の教えや諸法に<sup>32)</sup>自信を持ち、座から立ち上がると、右肩を肌抜き、世尊に合掌礼拝して世尊にこう申し上げた。「大徳よ、私は潜り抜けました。潜り抜けたのです。この私は世尊と法と比丘の僧伽とに帰依いたします。今日から命のある限り、死ぬまで、〔三〕帰依し、〔世尊の教えに〕浄信を抱く優婆塞として私を護念して下さい」と<sup>33)</sup>。

その時、世尊はアナータピンダダ長者にこう言われた。「長者よ、お前は名を何と申す」と。

「大徳よ、私の前はスダッタでございますが、見寄りなき者達に施食を与える者ですから、私のことを『アナータピンダダ長者、アナータピンダダ長者』と人々は認識しております」

「長者よ、お前の出身地はどこだ」

「大徳よ、西の<sup>34)</sup>地方にはコーサラ国のシュラーヴァスティーという町がありますが、そこに私は住んでおります。世尊はシュラーヴァスティーにおいて下さい。私は死ぬまで、衣・施食・臥座具<sup>35)</sup>・病気の時に飲む薬といった資具を以て、比丘の僧伽共々世尊にお仕えいたします」

「長者よ、シュラーヴァスティーに精舎はあるのか」

「大徳よ、ございません」

「長者よ、比丘達は精舎のあるところに行き来し、留まるべきものと考えらるろう」

「世尊よ、お出で下さい。私はシュラーヴァステイーに精舎をお造りいたします。そうすれば、比丘達も行き来し、留まるべきものと考えて下さるでしょう」

世尊はアナータピンダダ長者に沈黙を以て同意された。その時、アナータピンダダ長者は世尊が沈黙を以て同意されたのを知ると、世尊の両足を頭に頂いて礼拝し、世尊のもとから退いた。[171] それから彼はラージャグリハで仕事や用事をすべてやり終え、〔目的を〕達成すると、世尊のもとに近づいた。近づくと、世尊の両足を頭に頂いて礼拝し、一隅に坐った。一隅に坐ったアナータピンダダ長者は、世尊にこう申し上げた。「世尊よ、お供の比丘を私にお貸し下さい。世尊のためにそのお供の比丘と一緒に私は精舎を作りたいのです」と。

世尊は<アナータピンダダ長者とその従者、そしてシュラーヴァステイーに住む人々は、どの比丘の言うことを聞くだろうか>と考えられた。〔世尊〕は比丘シャーリプトラを思いついた。そこで世尊は同志シャーリプトラに「シャーリプトラよ、アナータピンダダ長者とその従者、そしてシュラーヴァステイーに住む人々に思いを凝らせ」と告げられた。同志シャーリプトラは沈黙を以て世尊に同意した。そして同志シャーリプトラは世尊の両足を頭に頂いて礼拝し、世尊のもとから退いた。

さて同志シャーリプトラはその同じ夜が明けると、午前中に衣を身につけ、衣鉢を持ってラージャグリハに托鉢に入った。ラージャグリハで托鉢して食事の用意をし、食事を終えた後で〔そこから〕退き、〔いつもと〕同じように使用した臥具と座具を片づけて、衣鉢を持つと、シュラーヴァステイーに向けて遊行に出掛けた。

その時、アナータピンダダ長者は沢山の乾飯を<sup>36)</sup>持って一夜一夜を明かしながら、シュラーヴァステイーに到着した<sup>37)</sup>。彼はシュラーヴァステイー〔の町〕には入らずに<sup>38)</sup>、園林という園林、遊園という遊園、苑林という苑林、そして経行処を歩き回り<sup>39)</sup>、慎重に吟味しながらこう言った。「シュラーヴァステイーから遠すぎず近すぎず、日中は雑踏や喧噪が少なく、夜は雑音や騒音が

少なく、また虻・蚊・風・熱・蛇との接触が少ない地所はどこであろうか。そこに私は世尊のために精舎を建立したいのだが」と。

アナータピンダダ長者はジェータ太子の園林がシュラーヴァステーから遠すぎず近すぎず、日中は雑踏や喧噪が少なく、夜は雑音や騒音が少なく、また虻・蚊・風・熱・蛇との接触が少ないと見た。そして見ると、<私は世尊のためにここに精舎を建立しよう>と彼は考えた。彼は自分の家には入らずに<sup>40)</sup>、ジェータ太子のもとに近づいた。近づくと、ジェータ太子に「太子よ、私に園林を譲って下さらないか。私はそこに世尊のための精舎を建立しようと思うのだ」と言った。[172] 彼が「長者よ、これは私の“園林”ではなく“遊園”だ。これは私のものだ」と言うと、再三アナータピンダダ長者はジェータ太子にこう言った。「太子よ、私に園林を譲って下さらないか。私はそこに世尊のための精舎を建立しようと思うのだ」と。

「長者よ、千万〔金〕<sup>41)</sup>を敷き詰めても私はこの園林を手放すつもりはない」

それでもアナータピンダダ長者はジェータ太子にこう言った。

「太子よ、あなたは園林の価値をお決めになった。金や黄金を受け取られよ。園林は私のものだ」

「誰が価値を決めたのだ」

「あなたが価値を決めたのだ」

二人は価値が決まったとか決まらないとか言って喧嘩になってしまったので、役人達のもとに向かった。その道中、四人の世間の守護神達はくアナータピンダダ長者は世尊のために精舎を建立しようと懸命になっている。彼に力を貸してやらねば>と考えた。そこで彼らは役人に変装すると、裁判所に<sup>42)</sup>坐っていた。アナータピンダダ長者とジェータ太子とは<sup>43)</sup>役人達のもとに近づいた。その時、アナータピンダダ長者は<sup>44)</sup>役人達に事の次第を詳細に説明した。彼らは言った。「太子よ、あなたは園林の価値を決めたことになる。黄金を受け取れ。園林は長者のものだ」と。

〔太子〕は黙ってしまった。一方、アナータピンダダ長者は、荷車、積荷、駕籠、箱<sup>45)</sup>、駱駝、牛、驢馬〔等〕で沢山の黄金を運び<sup>46)</sup>、そのすべてをジェータ林に敷き詰め始めたが、充分ではなく、ある地所は〔金を〕敷き詰めらず



にいた。そこでアナータピンダダ長者は〔自分の〕財を考えながら、しばらく黙り込んだ。

<どちらの金蔵を開けば、まだ〔金を〕敷き詰めていない地所に過不足なく〔金を〕敷き詰め、再び〔金で〕覆う必要がなくなるだろうか>と。

ジェータ太子はくきっとアナータピンダダ長者は“どうして園林ごときにこれほどの大財を捨てられようか”と後悔しているのだ>と考えた。こう考えると、アナータピンダダ長者にこう言った。「長者よ、もしも後悔しているのなら、金を取るがよい。園林は私のものだ」

「太子よ、私は後悔などしておらぬ。そうではなく、私は自分の財を考えながら、しばらく黙り込んでいただけた。<どちらの金蔵を開けば、まだ〔金を〕敷き詰めていない地所に過不足なく〔金を〕敷き詰め、再び〔金で〕覆う必要がなくなるだろうか>とね」

その時、ジェータ太子はくブツダ<sup>47)</sup>は賤しき方であるはずがないし、説法が劣っているはずがない。だって今、この長者は園林ごときにこれほどの大きな財の塊を<sup>48)</sup>捨てようとしているのだからな>と考えた。[173] こう考えると、アナータピンダダ長者に言った。「長者よ、〔金が〕敷き詰められていない地所を私に譲ってくれ。世尊のために私はそこに門屋を作りたいのだ」と。

アナータピンダダ長者はジェータ太子に〔金が〕敷き詰められていない地所を譲り、そこにジェータ太子は世尊のために門屋を作ったのである。

その時、外道の者達は、アナータピンダダ長者が世尊のために精舎を建立しようとしていると〔知り〕、激しい怒りで心を動揺させると、徒党を組んでアナータピンダダ長者のもとに近づいた。近づいて、「長者よ、お前は沙門ガウタマのために精舎を建立してはならない。何故なら、我々は都城を分配し、ラージャグリハは沙門ガウタマのもの、そしてシュラーヴァスティーは我々のものとなったからだ」と言う、「お前達が分配したのは都城であって、私の財産ではない。希望する者に、私は法蘊（精舎）を作らせる」と彼は言った。

彼らは王のもとに行ったが、そこでも彼らはアナータピンダダに論破された。厚顔無恥の外道達が「長者よ、我々はお前の望みを叶えてやるわけにはいかぬ。

沙門ガウタマの最上の声聞がやってきて、もしも彼が我々を論破したら、精舎を作らせてやろう」と言う、「よかろう。先ず私は聖者シャーリプトラに許可を得るとしよう」と彼は言った。

長者アナータピンダダは同志シャーリプトラのもとに近づいた。近づくと、同志シャーリプトラの両足を頭に頂いて礼拝し、一隅に坐った。一隅に坐った長者アナータピンダダは、同志シャーリプトラにこう言った。「大徳シャーリプトラよ、外道の者達はこんなことを申しておりました。『長者よ、我々はお前の望みを叶えてやるわけにはいかぬ。沙門ガウタマの最上の声聞がやってきて、もしも彼が我々を論破したら、精舎を作らせてやろう』と。これに関してどういたしましょうか」と。

同志シャーリプトラはく彼らに何らかの善根があるであろうか、あるいはないであろうかと考え、くあると見た。

<誰のもとに〔その善根〕は結び付けられているのか。私自身だ>

彼は再びく私のもとに〔その善根が〕結び付けられただけの者達が〔論争によって〕教導されるべきなのか、あるいは他にも論争によって教導されるべき者達がいるのかと考える、くいると見た。くでは、いつ彼らは集まってくるのか。七日後である>と考えると、彼は精神を集中して<sup>49)</sup>「長者よ、そうしよう。ただし七日後にだ」と言った。すると長者アナータピンダダは喜びを生じ、外道達のもとに近づいた。[174] 近づいて、外道達に「〔お前達<sup>50)</sup>、〕大徳シャーリプトラは『承知した。そうしよう。ただし七日後にだ』と申された」と言うと、彼らは考えた。くこれにはきつと二つの理由がある。一つは彼が逃げ出そうと考えているか、または味方を捜そうとしているかのどちらかだ。〔そうでないなら<sup>51)</sup>〕この場に及んで、どうして時間稼ぎなんかするもんか。我々も味方を捜そう>と。

彼らは味方を捜し始めた。味方を捜していた彼らは、ラクタークシャという遊行者を見つけた。彼らは彼に言った。「あなたは我々と同じく梵行を修するお方だ。沙門ガウタマの最上の声聞が我々と論争するために〔この地に〕呼ばれたが、彼は味方を捜している。あなたに我々の助太刀をして欲しいのだが」と。

「何時だね」

「今から七日後だ」

「よかろう。そうしよう。あなた方が集う時、私に知らせよ」

外道達は心を震わせ動揺させつつ、来る日も来る日も味方を探し求めながら、日にちを勘定したのである。

さて七日目になると、長者アナータピンダダは広大な露地のある地所に〔彼らの〕座を設え、同志シャーリプトラのためには獅子座を設えた。様々な地方に住む外道達、シュラーヴァスティーに住む人々、そしてその周辺に住む何百千という有情達が、ある者達は好奇心を起こし、またある者達は前世での善根に促されて集まった。その後、同志シャーリプトラは従者を引き連れた長者アナータピンダダに尊敬されながら論争する会場に入り、教導されるべき人々を眺めながら、笑みを浮かべ、落ちついた立ち居振る舞いで<sup>52)</sup>獅子座に昇ると、腰を下ろした。その衆会の者達は皆、心を落ちつかせ、同志シャーリプトラをしげしげと眺めながら坐った。

<sup>53)</sup>そこで、同志シャーリプトラが外道達に「お前達が先に〔神変を〕現ずるのか、あるいは〔私が先に現じた神変を〕お前達が破するのか」と告げると、「我々が〔先に神変を〕現じ、お前が〔それを〕破するのだ」と彼らは言った。同志シャーリプトラは考えた。くもしも私が先に神変を現じれば、神を含めた世間の者達が〔それを〕破することなどできないであろう。遊行者のラクタークシャなど言うに及ばぬと。

こう考えると、遊行者のラクタークシャに「お前が現ぜよ。私が破する」と言った。彼は魔術に精通していたので、[175] 花が咲き乱れるマンゴーの木を化作したが、同志シャーリプトラが猛烈な雨風を放つや、それで木は根元から引き抜かれて方々に散らばって、行者達の力の及ぶところではなかった。続いて彼は蓮池を化作したが、同志シャーリプトラが若い象を化作するや、それは〔蓮池〕を悉く踏み潰した<sup>54)</sup>。彼は頭が七つある龍を化作したが、同志シャーリプトラがガルダ鳥を化作するや、それは〔龍〕を連れ去った。彼は屍鬼を化作したが、同志シャーリプトラが呪縛するや、悪さをする屍鬼は自殺を目論見

み、〔ラクタクシャ〕の頭上めがけて突進してきた。すると彼は恐れ戦き、吃驚し、毛穴を粟立てて、同志シャーリプトラの両足に平伏した。「聖者シャーリプトラよ、お助けを！〔あなたに〕帰依いたします」と。

そこで同志シャーリプトラが呪縛を解くと、その屍鬼は静かになった。同志シャーリプトラが彼に法を説くと、彼は浄信を生じて言った。「聖者シャーリプトラよ、私は見事に説かれた法と律とに従って出家し、具足戒を受け、比丘になりたいのです。私は聖者シャーリプトラのもとで梵行を修したいのです」と<sup>55)</sup>。

同志シャーリプトラは彼を出家させ、具足戒を授け、教誡を与えた。彼は精進し、努力し、勤修したので、一切の煩惱を断じ、阿羅漢性を作証した。阿羅漢となった彼は三界の貪を離れ、土塊も黄金も等しく、虚空と掌とを等しく見る心を持ち、斧〔で切られても〕栴檀香〔を塗られても〕同じことで、智で〔無知の〕殻を破り、〔三〕明・〔六〕通〔四〕無礙解を獲得し、有・利益・貪・名声<sup>56)</sup>からは顔を背け、インドラ神やインドラ神に付き従う神々に供養され、恭敬され、礼拝される者となった<sup>57)</sup>。すると、その衆会の者達は驚きの余り瞠目し、同志シャーリプトラに浄信を抱いて言った。「聖者シャーリプトラに論者の大家が降参したぞ！」と。

こう知ると、彼らは同志シャーリプトラの顔を仰ぎ見た。すると、同志シャーリプトラはその衆会の者達の性質・気質・本性・本質を知って、それに相応しい、四諦を洞察させる法を説くと、それを聞いた何千もの有情達は卓越した偉大な性質を獲得した。ある者達は声聞の悟りに、ある者達は独覚の悟りに、ある者達は無上正等菩提に心を起こした。ある者達は〔三〕帰依して学処を授かり、ある者達は預流果を、ある者達は一來果を、ある者達は不還果を作証し、またある者達は出家して一切の煩惱を断じると、阿羅漢性を作証した。またさらに多くの衆会の者達はブッダに傾倒し、法に傾注し、僧伽に傾仰した<sup>58)</sup>。外道達は考えた。

[176] <我々は論争で彼を屈服させることはできない。〔何か〕よい手だてを講じなければならんわい。この同じ場所では有給の仕事をしよう。その後〔奴の〕隙をつき、奴を拘束して<sup>59)</sup>殺してしまえ！>と。

彼らは皆、集まって長者アナータピンダダのもとに行くと、言った。「長者よ、お前のせいで我々の一切の生活の元は断たれた。どうか哀れみを垂れ、お前の精舎で有給の仕事をさせてくれないか。我々は長い間、ここで暮らしてきたので、〔今さら〕故郷を捨てたくないのだ」と。

長者アナータピンダダは「先ずは聖者シャーリプトラの許しを得なければならぬ」と言った。彼は同志シャーリプトラのもとに近づいた。近づくと、同志シャーリプトラにこう言った。「聖者よ、外道の者達は『我々の一切の生活の元は断たれてた。どうか哀れみを垂れ、お前の精舎で有給の仕事をさせてくれないか。我々は長い間、ここで暮らしてきたので、〔今さら〕故郷を捨てたくないのだ』と申しております」と。

同志シャーリプトラは<彼らには何らかの善根があるであろうか、あるいはないであろうか>と精神を集中し始めた。彼は<ある>と見た。

<〔その善根〕は誰のもとに結び付けられているのか。私自身だ>と。

精神を集中し終わると、「長者よ、そうするがよい。これに関して何の不都合があらうか」と言った。彼らはその精舎で有給の仕事をし始めた。同志シャーリプトラは鉄杖を手にした恐ろしい男を化作すると、その〔男〕は〔彼らに〕その仕事をさせようとした。同志シャーリプトラは彼らを教導すべき時が来たたと知ると、彼らの近くにある木の下を経行しながら佇んでいた。彼らは彼を見て考えた。<人気のない所に立っているぞ。今こそ彼を殺す時だ！>と。

彼らは彼のもとに近づくと、〔彼を〕取り囲んで立った。同志シャーリプトラは考えた。<如何なる心を抱いて、彼らは私のもとに近づいたのか>と。やがて彼は<殺意を抱いてだ>と見た。彼は〔自分が〕化作した、鉄杖を手に持つ〔男〕を〔彼らに〕放った。その男は「さあ、仕事をしろ！」と言いながら彼らを追いかけ回した。彼らは言った。「聖者シャーリプトラよ、お助けを！」と。

彼は言った。「同志よ、行け。先ず彼らを休ませてやれ」と。

彼らは考えた。<彼は何と立派なお方だ！ 我々は彼に殺意を抱いていたのに、彼は我々に慈しみの心を抱いている！>と。

こう考えると、彼らは浄信を抱いた。〔177〕その後、同志シャーリプトラは

彼らの性質・気質・本性・本質を知って、それに相応しい、四諦を洞察させる法を説き、それを聞くと、彼らは二十の峰が聳え立つ有身見の山を智の金剛で粉碎し、流預果を作証したのである<sup>60)</sup>。

彼らは真理を知見して言った。「シャーリプトラよ、我々は見事に説かれた法と律とに従って出家し、具足戒を受け、比丘になりたいのです。我々は大徳シャーリプトラのもとで梵行を修したいのです」と<sup>61)</sup>。

同志シャーリプトラは彼らを出家させ、具足戒を授け、教誡を与えた。彼らは精進し、努力し、勤修したので、五支より成る輪廻の輪が不安定なものとなり、またあらゆる有為の行く末は破壊・落下・壊散・敗壞する性質のとして捨て去り、一切の煩惱を断ずると、阿羅漢性を作証した。阿羅漢となった彼は三界の貪を離れ、土塊も黄金も等しく、虚空と掌とを等しく見る心を持ち、斧〔で切られても〕 栴檀香〔を塗られても〕 同じことで、智で〔無知の〕 殻を破り、〔三〕 明・〔六〕 通〔四〕 無礙解を獲得し、有・利益・貪・名声からは顔を背け、インドラ神やインドラ神に付き従う神々に供養され、恭敬され、礼拝される者となったのである<sup>62)</sup>。

さて同志シャーリプトラは精舎〔を計るため〕の紐の一方の端を掴み、長者アナータピンダダももう一方の端を掴んだ。すると同志シャーリプトラは微笑を現じ始めた。長者アナータピンダダは言った。「聖者シャーリプトラよ、如来、あるいは如来の声聞は因縁なくして微笑を現ずることはありません。聖者シャーリプトラよ、微笑を現じられたことには如何なる因縁があるのですかと。

「長者よ、その通りだ。その通りなのである。如来、あるいは如来の声聞は因縁なくして微笑を現ずることはない。今、お前は紐を掴んだが、〔その瞬間〕兜卒天衆では黄金の宮殿がすでに完成してしまったのだ」

すると長者アナータピンダダは驚きの余り瞠目して言った。「聖者シャーリプトラよ、もしもそうなら、紐をさらに長く伸ばし、私は〔さらに〕心を清浄にいたします！」と。

同志シャーリプトラはその紐を握った。長者アナータピンダダはさらに激しい浄信の力によって<sup>63)</sup>心を清浄にした。彼が浄信を生じるや否や、その黄金の宮殿は四宝作りになった。同志シャーリプトラはこれを彼に知らせた。すると、長者アナータピンダダはますます膨れ上がった福德を相続させながら、[178]十六の大精舎と六十の僧房を造らせた。十六の大精舎と六十の僧房を造らせ、一切の資具を完備すると、同志シャーリプトラのもとに近づいた。近づくと、同志シャーリプトラにこう言った。

「聖者シャーリプトラよ、世尊は一日にどれほどの距離を旅されるのですか」

「長者よ、転輪王と同じだけの距離である」

「転輪王はどれほどの距離を〔旅するの〕ですか」

「長者よ、転輪王は一日に十クローシャ<sup>64)</sup>の距離を旅するのだ」

そこで長者アナータピンダダはシュラーヴァスティーとラージャグリハとの間で〔世尊が〕休憩〔される数〕を<sup>65)</sup>計算して経行処を<sup>66)</sup>設け、布施堂を建立し、時間を知らせる男を置き、日傘・旗・幟で飾り付け、栴檀香の水を撒き、芳香を放つ香炉を設置し、塔門を造り、そして季節や時節にあった薬を用意した。それから必需品を準備すると、〔長者〕はある男に告げた。

「おい、お前、ちょっと来い。お前は世尊のもとに近づくのだ。近づいたら、世尊の両足を礼拝し、我々の言葉として『恙なくお過ごしですか。お変わりございませんか。健康でいらっしゃいますか』とお尋ねし、日々の生活、壮健、快適さ、申し分のないこと、安住〔等〕を〔伺ってこい〕。そしてこう言うのだ。『世尊はシュラーヴァスティーにおいて下さい。私は命ある限り、衣・食事・臥具・座具・病気を縁とする薬といった資具を以て、比丘の僧伽を含めて世尊にお仕えいたします』とな」

「畏まりました、旦那様」と言うと、その男は長者アナータピンダダに同意し、ラージャグリハに向けて出発し、次第してラージャグリハに到着した。それから旅の疲れを癒すと、彼は世尊のもとに近づいた。近づくと、世尊の両足を頭に頂いて礼拝し、一隅に立った。一隅に立つと、その男は世尊にこう申し上げた。「大徳よ、長者アナータピンダダになり代わり、世尊の両足を頭に頂いて礼拝いたします。一前に同じ。乃至一 安住〔等〕を〔お伺いいたします〕」

と。

「おお、男よ、長者アナータピンダダと汝が安らかならんことを」

「大徳よ、長者アナータピンダダはこう申しておりました。『世尊はシュラーヴァスティーにおいで下さい。私は命ある限り、衣・食事・臥具・座具・病気を縁とする薬といった資具を以て、比丘の僧伽を含めて世尊にお仕えいたしません』と」

[179] 世尊は沈黙を以てその男に同意した。その時、その男は世尊が沈黙を以て同意したのを知ると、世尊の両足を頭に頂いて礼拝し、世尊のもとから退いた。

さて〔よく自己を〕調御し、寂靜で、解脱し、安穩であり、〔よく自己を〕調伏し、阿羅漢であり、離貪し、端正な世尊が、〔よく自己を〕調御し、寂靜で、解脱し、安穩であり、〔よく自己を〕調伏し、阿羅漢であり、離貪し、端正な従者を従えている〔様〕は、雄牛が牛の集団に、象が若象の集団に、獅子が牙を有する動物の集団に、白鳥の王が白鳥の集団に、ガルダが鳥の集団に、バラモンが弟子の集団に、名医が患者の集団に、勇者が武士の集団に、導師が旅人の集団に、隊商主が商人の集団に、組合長が市民の集団に、城主が大臣の集団に、転輪〔王〕が千人の息子に、月が星の集団に、太陽が千の光線に、ドゥリタラーシュトラがガンダルヴァの集団に、ヴィルーダカがクンバータの集団に、ヴィルパークシャが龍の集団に、クベーラが夜叉の集団に、ヴェーマチトラがアスラの集団に、シャクラが三十〔三〕天に、ブラフマンが梵衆〔天〕に困遶されているが如くであった。〔また世尊〕は、屈いだ大海の如く、〔満々と〕水を湛えた大海の如く、〔また〕興奮せぬ象王の如くであった。よく調御された諸根によって〔その〕振る舞いと行動は落ち着いており、三十二の偉人の相によって見事に飾られ、八十種好によって身体は光り輝き、一尋の光明で飾られ、千の太陽をも凌ぐ光を具え、動く宝の山の如く、何処から見ても素晴らしく、十力、四無畏、三不共念住、そして大悲を具えた〔世尊〕は、偉大なる比丘の僧伽、長者アナータピンダダ、シュラーヴァスティーに住む大勢の人々、そして何百千もの神々に随行されながら、シュラーヴァスティーの



都城に到着した<sup>67)</sup>。[180] 世尊がシュラーヴァスティーの都城に入り、意を決して都城の敷居に右足を降ろされた時、六種の地震が生じた。この大地は揺れ、揺れ動き、激しく揺れ、振れ、振れ動し、激しく振れ動いた。東方が浮くと西方が沈み、西方が浮くと東方が沈み、南方が浮くと北方が沈み、北方が浮くと南方が沈み、周辺が浮くと中央が沈み、中央が浮くと周辺が沈んだ。そして、この世間全体は世間の中間も含めて広大な光明によって満たされ、虚空では天の太鼓が鳴り響き、天空に留まった神々は世尊の頭上から天界の青蓮華・黄蓮華・赤蓮華・白蓮華を撒き、また沈水香、零陵香、白檀香、鬱金香、タマラ樹の葉、天界の曼陀羅華を撒き、布片を降り注いだ。

世尊が町に入られる時、他にも次のような希有なることが起こる。〔すなわち〕狭い所は広くなり、低い所は高くなり、高い所は平坦となる。象が鳴き、馬が嘶き、牛は吠える。家にある様々な楽器が独りでに鳴り出す。盲者が視力を獲得する。聾者が聴力を獲得する。啞者は話力を獲得する。不完全な諸根が完全になる。酒酔いで取り乱していた者は酔いから醒める。毒を飲んだ者は解毒する。憎みあっている者は慈しみを起こす。妊婦は無事に出産する。牢獄に繋がれた者は釈放される。財なき者は財を得る。世尊が町に入る時、この他にも百千もの未曾有なることが起こるのである<sup>68)</sup>。

さて世尊はこのように手厚く尊敬されながら、シュラーヴァスティーに入られた。入られると、比丘の僧伽の前に設えられた座に坐られた。長者アナータピンダダは、友人・親戚・親類の人々に取り囲まれながら、[181] 黄金の水差しを持ち、水を注ごうとしたが、水は出てこなかった。長者アナータピンダダは落胆して考えた。<私は〔これまで〕罪業を何も犯していませんように！>と。

世尊は言われた。「長者よ、お前は罪業を何も犯してはいない。そうではなく、お前は〔昔〕その場所に立って、ちょうどこの場所を過去の正等覚者達に布施したのだ。別の場所に立って〔水を〕注いでみよ」と。

彼は別の場所に立って〔水を〕注いだ。世尊は五支を備えた声を以て自らジェータ林に響かせた。〔声〕がジェータ林に轟きつつある時、ジェータ太子は

考えた。〈ああ、世尊は最初に私の名前を出して<sup>69)</sup>下さるように！〉と。

世尊はジェータ太子の心を〔自らの〕心で知ると、彼の名前を最初に出した。「比丘達よ、これはジェータ太子の林・アナータピンダダの園林である」と。

これを聞いて、ジェータ太子は「世尊が私の名前を最初に取り上げて下さった！」と大層〔心を〕浄らかにした。たくさんの財を有していた彼は<sup>70)</sup>それに対して喜びを生じ、世尊のために四宝から成る門屋を造らせた。

こうして結集を行った長老達は経典中に「世尊はシュラーヴァステイーにあるジェータ林・アナータピンダダの園林で時を過ごしておられた」と書き記しているのである。

#### 註

- 1) 訳文中に [ ] 括弧で、その頁数を示す。
- 2) Tib. の出典に関しては葉数・表裏 (a/b)・行数、漢訳の出典は頁数・段 (a/b/c)・行数のみを示す。
- 3) gr̥he. Tib. は「自分の家に (rang gi khyim du)」(79a5) とする。
- 4) äryāḥ. Tib. は「家長達 (nang rje dag)」(79a5) とする。漢訳は「賢首聖者」(138b21) とする。
- 5) bhaktam pacata. Tib. は「米を炊け ('bras chan tshos shig)」(79a6) とする。漢訳は次の「スープを調理せよ」を含めて「造諸飲食」(138b22) とする。
- 6) khādyakāny ullāḍayata. Tib. は「副食品を飾り付けよ (bca' bdag bzang du gyis shig)」(79a6) とする。
- 7) pratijāgr̥ta. ここは文脈より、命令形でなければならない。よって、pratijāgrata に改める。Tib. も zhal ta dag gyis shig (79a6) とする。
- 8) āvāho vā bhaviṣyati vivāho vā. 漢訳は「為復嫁女。為當娶妻」(138b24) とし、āvāho と vivāho の順番が Skt. と入れ替わっている。
- 9) 「ブツダ (budha)」という音が鳥肌を喚起する「音」として機能する用例は、有部系の説話文献において散見する。平岡 [2002: 359-364] 参照。
- 10) śivikādvāraṃ rātryā ..... vighāto bhaviṣyati (167.21-23). Tib. は「その時、南門は二更において門が開いたままになっていたが、初更には突然やってくる使者達に足止めを食らわせることにならないように、開いたままになっていたし、後更には立ち去る使者達に足止めを食らわせることにならないように、開いたままになっていた」(80a2-3) とする。また漢訳も「其国常法。夜分初更不閉。防外使來令無障礙。於後夜分城門亦開。用防内使無有障礙」(138c16-18) とし、Tib. に近い。
- 11) yāvāt paśyati śivikādvāraṃ vivṛtam tiṣṭhati sālokēna ca sphuṭam. Tib. はこれを欠

- く。漢訳は「見門開明随明而出」(138c18-19)とし、Skt.に近い。
- 12) tasya. Tib.は「長者アナータピンダダは(khyim bdag mgon med zas sbyin)」(80a3)とし、漢訳も「給孤長者」(138c18)とし、Tib.に一致する。
- 13) asaṃprāptaṃ vā syāt prabhūtaṃ kulaśulkaṃ. ここには文脈には相応しくない一文が存在し、これに相当する訳はTib.も漢訳もないので、これを省略する。ただし、Gnoliの指摘するように、この平行文が見られるMSV臥座事のTib.には、これに相当する一節が存在する。
- 14) madhuskandhasya devaputrasya sthaṇḍilaṃ pradakṣiṅkaroti namaskaroti. Tib.および漢文はこれを欠く。
- 15) madhuskandhadvaputrasya. Tib.はこれを「南方の門に住んでいた神は(lho phyogs kyi sgo na gnas pa'i lha gang yin pa des)」(80a5)とし、漢訳も「此城門所居天神」(138c21)とする。
- 16) anyadevatā namaskāraṃ kariṣyati. Śayanāsanavastu (15.30-31)はanyadevatānamaskāraṃ kariṣyatiとするので、この読みを採る。なおTib.および漢訳は、このマドゥスカンダ天子の心の描写自体を欠く。
- 17) adyaivānāthapiṇḍadena ..... iti viditvā (168.3-4). Tib.も漢訳はこれを欠く。
- 18) Tib.はここに「すべて(thams cad)」(80a5)を置き、漢訳も「於其中間而皆大明」(138c22-23)とする。
- 19) vyūḍhavantō. Tib.は「上半身は大きく(stod po che)」(80b1)とする。漢訳には相当箇所なし。Cf. Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar, ed. F. Edgerton, New Haven, 1953, §34.1.
- 20) āmuktamaṇikuṇḍalāḥ. Tib.は「耳飾りと手足の飾りをつけ(rna cha dang ni gdub kor thogs)」(80b2)とする。漢訳には相当箇所なし。
- 21) kāmbojikā-. Tib.は「トカラの(tho gar yul gyi)」(80b2)とする。漢訳には相当箇所なし。
- 22) buddho. Tib.は「仏・世尊は(sangs rgyas bcom ldan 'das)」(80b5)とする。漢訳は「佛」(139a15)とし、Skt.に一致する。
- 23) anāthapiṇḍadaṃ gr̥hapatim āgamayamānaḥ. Tib.は「長者アナータピンダダがやってくると、留められた(khyim bdag mgon med zas sbyin 'ong ba la gzhes so)」(80b7)とし、漢訳は「知給孤長者來故」(139a18)とする。
- 24) adrākṣīt anāthapiṇḍado gr̥hapatir bhagavantaṃ dūrād eva deṣṭvā ca punar. Tib.および漢訳は下線部を欠く。
- 25) āśaktiṃ. これでは読めない。Tib.はこれを「願いを(re ba)」(81a2)とし、これからākāṅkṣāmというSkt.が想定される。一方、漢訳は「斷一切結縛」(139a23)とするので、漢訳を参考に、これをāśaktiṃに改める。
- 26) 定型句 9A (ブツダの説法). 以下、定型句の番号は拙著『説話の考古学：インド仏教説話に秘められた思想』(東京, 2002, 153-187)による。

- 27) svargakatha. これを svargakathā に改める。
- 28) āsvāda-. Tib.はこれを「利少なく (mnog chung ba)」(81a5) とし、漢訳は「不業諸欲過失」(139a29) とする。
- 29) dharmān. Tib.は「法話を (chos kyi gtam)」(81a6) とし、漢訳は「宗法」(139b1) とする。
- 30) anāthapiṇḍado gṛhapatis tasminn evāsane niṣaṅgaś catvāry āryasatyāny abhisameti tadyathā duḥkhaṃ samudayo nirodho mārgaḥ. Tib. および漢訳はこの一文を欠く。
- 31) rañjanopagaṃ raṅge. Tib. は下線部を「適切な顔料の中に (tshon rtsi 'os pa'i nang du)」(81b1) とする。漢訳には対応箇所なし。
- 32) śāstuś sāsane dharmeṣu. Tib. はこれを「師によって説かれた諸法に (ston pas bstan pa'i chos rnam la)」(81b3) とし、漢訳は「於師教中心無怖畏」(139b8) とする。
- 33) 定型句 9D (預流者の歓声)。
- 34) prācīneṣu. シュラーヴァスティーはラージャグリハから見れば地理的に「西」でなければならぬ。よってこれを paścīmeṣu に改める。ひよっとすれば、この文献の編纂者の居住地がシュラーヴァスティーよりも西であり、そこから見ればシュラーヴァスティーが東だったことを示唆する用例かも知れない。なおTib. はこれに相当する箇所を yul pra tsin zhes bgyi ba na (81b6) と音写している。また漢訳は「在此北方」(139b15) とする。
- 35) Tib. はここに「臥座具 (gzims cha)」(81b7) を置く。これは定型表現 (1A) の一部であり、ここには通常 -śayanāsana- がなければならない。よって、これを補う。漢訳は「四事供養」(139b18) とし、具体的な中身には言及せず、四つを纏めて表現している。
- 36) śambalam. 難解な語である。Tib.はこれを「旅行食 (lam rgyags)」(82b2) とし、漢訳も「道糧」(139c7-8) とし、Tib.と同じ理解を示すので、ここでもこれに準じて訳す。
- 37) Tib. はここに「到着すると (phyin nas)」(82b3) を置く。
- 38) praviśann. Tib. はこれを「入らずに (ma zhugs pa nyid du)」(82b3) とする。この方が文脈に合うので、これを 'praviśann に改める。漢訳には対応箇所なし。
- 39) caṅkramam anucaṅkramyamāṇo suvicarann. Tib.はこの訳を欠き、「経行処を吟味して」(82b3) とする。
- 40) praviśann. Tib.はこれを「行かずに (ma song ba nyid du)」(82b7) とし、漢訳も「不帰本住」(139c14) とする。この方が文脈に合うので、'praviśann に改める。
- 41) Tib. の gser (83a3) および漢訳の「布金遍地」(139c18-19) より、「金」を〔 〕に補う。
- 42) arthādhikaraṇe. Tib.はこれを「目的〔達成〕のために (dgos pa'i phyir)」(83a5) とする。一方、漢訳は「於法司坐」(139c24) とする。
- 43) Tib.はここに「大臣である (sna chen po)」(83a5) を付加する。漢訳には対応箇所なし。
- 44) ここにもTib.は「大臣である (sna chen po)」(83a6) を付加する。漢訳には対応箇所

なし。

- 45) piṭakair. Tib.はこの訳語を欠く。漢訳では「筐籠」(139c29)がこれに相当しそうだ。
- 46) Tib.のみここに「やって来ると ('ongs nas)」(83a7)を置く。
- 47) Tib.はここに「世尊 (bcom ldan 'das)」(83b4)を付加する。漢訳には対応箇所なし。
- 48) mahāntam dhanaskandham. Tib.は下線部の訳を欠く。漢訳は「捨此積集多金」(140a5-6)とする。
- 49) samanvāhṛtya. Tib.および漢訳はこの訳語を欠く。
- 50) Tib.の shes ldan dag (84b1)より補う。
- 51) Tib.の de ma yin na (84b2)より補う。
- 52) samaśānteneryāpathena. Tib.は下線部の訳語を欠くが、不要な語のように思われる。漢訳も「整肅威儀」(140b26)とし、これに相当する訳語が確認できないので、これを省略する。
- 53) 以下、シャーリプトラと外道達との神変合戦が始まるが、神変行使に関しては、以下の拙稿を参照されたい。平岡聡「神通/神変の効能と使用上の注意—説話文献の用例を中心に—」『仏教研究』36, 2008, 209-229.
- 54) Tib.はここに「[踏み潰すと、蓮池という]名前だけが残った (ming gi lhag ma tсам zhiḡ bzhag go)」(85a4)を置く。漢訳は「尋復平地」(140c6-7)を置く。
- 55) 定型句 7A (出家の表明)。
- 56) satkāra を Tib.および定型句から補う。
- 57) 定型句 7C (阿羅漢)。
- 58) 定型句 9E (聞法の果報)。
- 59) baiṣkena. このままでは読めないので、Tib.の bgags te (86a1)に従って和訳する。漢訳は「得便之處」(141a6)とする。
- 60) 定型句 9C (預流果)。
- 61) 定型句 7A (出家の表明)。
- 62) 定型句 7C (阿羅漢)。
- 63) -vagena. Tib.の shugs kyī (87a5)により、-vegena に改める。
- 64) 漢訳は「両躰繕那半」(141c2)とする。
- 65) 漢訳は「両駅半」(141c3)とする。Tib.は gshegs dgongs (87b2)とする。
- 66) parikramaṇaka. Tib.は「休憩する場所 (gzhes sa dag byed)」とし、漢訳は「置四事供養」(141c3)とする。
- 67) 定型句 8C (仏弟子に圍繞されて遊行するブツダ)。
- 68) 定型句 8E (ブツダが都城の敷居を跨いだ時の希有未曾有法)。
- 69) nāmodgrahaṇam. nāma(dheya)m (ud)√grah が「名前を呼ぶこと」を意味することについては、以下の研究を参照されたい。藤田宏達『浄土三部経の研究』(東京, 2007, 463-468)。
- 70) tad dravyajātam. Tib.と臥坐事より、tena dravyajātena に改める。